

氏 名（本籍）	村治 学（東京都）
学 位 の 種 類	博士（音楽）
学 位 記 番 号	博甲第 51 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 15 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当 音楽文化研究科 音楽専攻
論 文 題 目	村治虚憧の六孔尺八の研究 —その創案と影響—
論文審査委員	主査 教授 高松 晃子 副査 教授 徳丸 吉彦 副査 教授 八木 正一

論文内容の要旨

本論文において筆者は以下の三点について考察する。第一点は尺八・村治流を創始した村治虚憧の音楽性について、第二点は村治虚憧の理想とした音楽を具現化するために開発した楽器「純律六孔尺八」について、第三点は虚憧が当時の尺八界、及び現代の尺八界に与えた影響についてである。

尺八は竹製、ノンリードの縦笛で、歌口の部分を内から外側に向かって削ぐのが特徴である。中国、唐代の楽器が祖先とされるが、奈良時代に雅楽の楽器の一つとして日本に伝来しており、その実物とされるものが正倉院などに残されている。尺八は江戸時代には普化宗という禅宗の一派の法器とされ、修行や儀式に使われた。そのため普化宗の僧侶である虚無僧以外が吹くことは禁じられていたが、明治維新により普化宗が解体され、尺八は法器ではなく楽器として開放され、広く普及することになった。

明治以降の近代の尺八を分類すると、明暗系・琴古流系・都山流系という大きな三つの流れとその他となる。明暗系は虚無僧時代からの修行音楽としての楽曲（本曲）を守る宗教音楽色の強い流れであり音楽性より精神性を重んじる。琴古流系は江戸時代に収集編纂された本曲のみならず外曲と呼ばれる箏や三味線との合奏も行う室内乐的な流れで、宗教一辺倒であった尺八に芸術性が加味される。都山流系は明治時代に導入された西洋音楽の影響を大きく受け、演奏者と聴衆といった意識を持ちステージ音楽へと変貌をはかった流れで

ある。琴古流と都山流の演奏活動により尺八も芸術活動の一つとして認識されるようになったと考えられる。

村治虚憧（1894-1978）の村治流は都山流系に属する。虚憧は都山流とそこから分派した上田流で修行した後 1928 年に村治流を興した。尺八楽においてはその流派独自の尺八曲を本曲と呼ぶが、虚憧は村治流本曲を約 40 曲発表した他、尺八と他の様々なジャンルとの融合を模索し、当時新しいメディアとして現れたラジオや SP レコードでもその作品や演奏を発表している。また戦後の 1952 年には指孔を増やした新しい楽器「純律六孔尺八」を開発し、1978 年に 82 歳でこの世を去った。

都山流や上田流からの分派として村治流の名前に言及した文献はいくつか存在するが村治流及び六孔尺八に特化しての先行研究はみあたらない。本論文の研究資料としては尺八関係の各種文献・資料に加え、虚憧本人が遺した楽譜や機関誌、手書の資料、さらに筆者が放送大学大学院に提出した修士論文も使用する。

論文全体の構成は、序論、第 1 章「村治流に至る尺八家元の流れ」、第 2 章「尺八手付の比較」、第 3 章「尺八の改良の歴史」、第 4 章「純律六孔尺八」、結論、とする。序論では虚憧の人物とその家族構成に触れ、筆者と虚憧の関係と本論文の執筆動機を示し、論文の方向性を提示する。

本論文前半の第 1 章、第 2 章では村治虚憧が新しい流派を興し、楽器の改良に思い至った原因を考察する。

第 1 章「村治流に至る尺八家元の流れ」では尺八における家元という用語を定義した上で虚憧が尺八の修行をした都山流と上田流、自らが創始した村治流の三つの流派を「技（音楽）」「枠（組織）」「我（人物）」の観点から比較する。現代の我々からみると尺八は日本古来の伝統音楽と捉えられがちであるが、虚憧が尺八の修行を開始した都山流も明治維新以後の西洋音楽流入の影響を非常に大きく受けている音楽である。虚憧はさまざまなジャンルの楽曲と尺八を組み合わせしていく過程で楽器の改良にも思い至ったと考えられるが、逆に楽器を改良したことで古典の楽曲にも和声を意識した編曲を施すようになったと推測される。

第 2 章「尺八手付の比較」では都山流・上田流・村治流の楽譜を比較検討し、尺八の手付における派手とは何かをさぐる。尺八における手付とは地歌や箏曲等の元々尺八パートの無かった楽曲に尺八のパートを加えることであるが、琴古流以前の流派ではベタ付けと呼ばれる方法で、元々あった箏や三味線（三弦）のパートとユニゾンで尺八の音を付ける事が多かった。しかし西洋音楽の影響を大きく受けた都山流の手付は元の楽曲になかった音を多く付け加えるもので、琴古流に比べて派手だと言われる。都山流は奏者が楽しむことを重視して華美に傾いたと筆者は考えているが、ここから分派した上田流は派手な都山流と地味な琴古流との「中庸」を目指した。これに対して村治流では現代における指揮者のような、楽曲全体を俯瞰した態度を採っていると考えられる。そのため手数は控え目であるが、他の楽器や歌と混線しない洒落た手付だとされ、箏や三味線を専門とする糸方から良い評価を得たと考えられる。尺八の記譜法は流派によって差異があるが、上田流も村治流も基本的に

は都山流の記譜法を踏襲している。従ってこの3つの流派に関しては尺八譜での直接比較が他流との比較よりも容易である。ここでは《千鳥の曲》を題材にまず尺八譜のままの状態各流派の楽譜を比較する。次に各流派の尺八譜を西洋五線譜に書き直した上で、各流の手付を比較しやすいように総譜状に縦に並べた状態で比較を行う。さらに、五線譜に含まれる情報を数値情報に置き換えた状態で表やグラフ化したうえで比較する。多面的な検討を行うことで各流派の音楽的な特徴を考察し、虚僂が村治流を興し新しい楽器を開発することになった音楽上の理由を推察する。

論文後半の第3章、第4章では尺八における楽器としての改良について考察し、村治虚僂が新しい六孔尺八を開発した経緯を推察する。尺八はノンリードの縦笛という不安定要素に加えて、自然の竹をそのまま加工するため他の楽器に比べて個体差が大きいという特徴がある。特に尺八が法器とされた時代の修行においては、奏者が個々の尺八に身体を馴らしていくことが強く求められた。この様な尺八の特色を克服するため明治以降は、材質、管内部の構造、加工技術、指孔の数と位置といった様々な観点で改良が試みられてきた。

第3章「尺八の改良の歴史」では、特許庁に申請された実用新案・特許関係の資料を中心に各種書籍や雑誌の記事も踏まえ尺八の改良の歴史を概観することで尺八奏者が尺八という楽器に何を求めていたのかを考察する。また、かつて法器であった尺八の基本的な形は5孔であるが、楽器としての尺八には無孔から12孔までの様々な工夫がある。指孔数の変遷からかつての法器尺八から楽器尺八への脱皮がどう試みられて来たかを考える。特に虚僂の六孔尺八と関係の深い七孔と六孔の尺八の先行事例は詳しく分析する。

第4章では村治虚僂の創案した新楽器「純律六孔尺八」に焦点を当て、虚僂がなぜ様々な指孔数から6孔を選択したのかを推察し新楽器の理想と現実を明らかにする。まず虚僂が新楽器開発に伴い、研究した結果をまとめた著作『尺八の新研究』や、邦楽誌や村治流機関誌に残された文章から、虚僂が考える邦楽楽理と楽器としての尺八の関係から、虚僂が尺八の改良に何を求めたのかを考察する。また、純律六孔尺八について後に記された資料からも虚僂の考案の正しさを考察する。

結論では、序論で立てた三つの問についてまとめる。第一の村治虚僂の音楽性については、西洋音楽の影響を受けて派手に傾いた都山流と少し揺り戻して琴古流と都山流の中庸を目指した上田流といった先例を参考にする。虚僂が村治流を興した動機としては、より様々な新しい試みを流派に縛られず自由に試しかつ自らの名前を以て発表・発信したいという強い思いがあったのではないかと推測される。第二の純律六孔尺八について、なぜ虚僂が六孔を選択したかについては音色に尺八らしさを保ちつつその操作性を向上させ様々な楽曲に対応するには六孔が最も適していると虚僂が判断したからだと推測されるが、そこには虚僂の邦楽楽理の研究の結果が反映されており、単なる洋楽への対応では無かったことが明らかである。さらに虚僂は従来よりも音律が安定した楽器を和声を重視した曲づくりに活かそうと考えたと推測される。第三の現代尺八への影響については以下の様に推論される。戦後間もない虚僂の六孔尺八の発案はすぐには受け入れられなかった。その理由としては

精神的には尺八という楽器が宗教の法器であった歴史から脱却すべきであるとする考え方と伝統を頑なに守ろうとする考え方が混在していたためでもあり、物質的には尺八が竹を素材に製管師が手作業で調律を行っていたことが大きい。しかし昨今、日本らしさの見直しとともに和楽器と西洋音楽の自然なコラボレーションも活発になってきており、その様な現場では虚憧の提案と同じ形状の6孔の楽器も多く使用されている。このことから虚憧の先駆的な尺八改良の考え方は間違いではなかったといえる。一方で3Dプリンターという新しい技術が開発され名器・名管と呼ばれる尺八のレプリカを作成することが比較的容易になりつつある。また金属等の素材を用いることで安定した音高が保てるようになる可能性があり、さらに進んだ新しい尺八が生まれつつある。新技術を使った尺八は現在五孔尺八が試作されているが次の段階として六孔・七孔が製作される可能性も大きいと考えられる。楽器製作技術の進歩とともに楽器の改良のスピードも加速度が付いてきているように見えるが、村治虚憧の純律六孔尺八もその改良史の1ページを担ったと言える。

なお、本論文には附録として以下の虚憧とその音楽に関する資料を添付する。

- ・村治虚憧著『尺八の新研究』翻刻
- ・村治虚憧原稿集
- ・マスメディアに表れる村治虚憧の活動 及び年表
- ・村治流楽譜公刊録
- ・村治虚憧著村治流本曲譜面集
- ・村治家家系図

以上

博士論文審査の要旨

審査委員会は「博士課程の学位論文審査等に関する内規」第 15 条に基づいて博士論文等審査を下記のように実施した。

音楽文化研究科博士後期課程 3 年次生、村治学による博士学位論文『村治虚憧の六孔尺八の研究—その創案と影響—』（令和 2 年 12 月 11 日提出）の審査について報告する。

この研究の目的は、尺八村治流を創始した村治虚憧（1894-1978）の活動と、彼が考案した新しい尺八の意義を明らかにすることである。法器であった尺八は、普化宗解体を機に楽器としての性質を持ち始め、創設された琴古流、都山流などの流派は音楽芸術としての尺八楽の可能性を追求したが、虚憧は既存の尺八の流派には飽き足らず、1928（昭和 3）年に自らの流派を立ち上げた。彼は、自流の本曲の創作だけでなく、他ジャンルの楽曲の手付けや、琵琶、洋楽器、義太夫節といった、それまでの尺八が合わせることのなかった相手との合奏を行なおうとした。そのような新しい試みのために楽器の改良の必要性を認識した虚憧は、純律（純正）六孔尺八と称する独自の尺八を開発した。執筆者は 1300 ページを超えるこの大部な論文において、虚憧が創立した村治流とそれ以前の流派、虚憧の創案した新楽器とそれ以前の楽器を比較することにより、昭和期の尺八界で村治虚憧が果たした役割と、後の尺八界に虚憧が与えた影響を具体的に明らかにした。

全体は、序論、第 1 章「村治流に至る尺八家元の流れ」、第 2 章「尺八手付の比較」、第 3 章「尺八の改良の歴史」、第 4 章「純律六孔尺八」、結論から成り、附録資料として、村治虚憧著『尺八の新研究』翻刻、村治虚憧原稿集、マスメディアに表れる村治虚憧の活動及び年表、村治流楽譜公刊録、村治虚憧著村治流本曲楽譜集、村治家家系図が付く。

第 1 章「村治流に至る尺八家元の流れ」では、尺八における「家元」という用語を定義した上で、虚憧が尺八の修行をした都山流と上田流、自らが創始した村治流の三つの流派を「技（音楽）」「枠（組織）」「我（人物）」の三つの観点から比較した。上田流を興した上田芳憧も村治虚憧も、その音楽の基盤を、普化宗に由来する尺八古典本曲にではなく、西洋音楽の影響を大きく受けた都山流の音楽に置いた。新しい事を自由に試せる上田流で修行した経験は、村治虚憧の独立後の活動、例えば、新しい組み合わせで尺八を用いたこと、他の邦楽ジャンルの楽曲を演奏したこと、ポピュラー音楽にも歩み寄ったことなどに生かされたと考えられる。ただ、上田流からの独立の背景には、このような音楽的な欲求だけではなく、弟子達からの要求、虚憧が自らの名前で作品を発表したいという意欲、そして経済的な問題などの要因もあったことが示された。

第 2 章「尺八手付の比較」では、都山流が「派手」とであると評されることに着目して、都山流・上田流・村治流の楽譜を比較して各流の特徴を考察した。結果として、手数や手付の音型にある程度の差異が認められたものの、その差異は小さくなく、都山流の派手さや三つの流派の特徴を楽譜情報のみから明確に示すことはできなかった。このことは、音色や演奏

習慣など、記譜できない要素に相違点があることを示唆している。

明治以降、邦楽家や楽器製作者はすでに特許という社会制度を利用していた。第3章「尺八改良の歴史」では、特許庁の資料を中心に各種文献や雑誌の記事も踏まえて尺八の改良の歴史を詳述し、尺八奏者が尺八という楽器に何を求めてきたのかを考察している。尺八の改良は、独特の修行を経ずとも誰もが安定した吹奏を可能にすることを目的に、幾度となく行われてきた。ここでは、材料、長さ、歌口の形、内径の構造、指孔の数といった要素がどのように検討、改良されてきたかをまとめている。

第4章「純律六孔尺八」では、村治虚僊が考案した「純律尺八」について考察し、虚僊が様々な指孔の数からなぜ六孔を選択したのか、という疑問を出発点にして、新楽器の理想と実際の形態を明らかにした。虚僊は、尺八の音程の不安定さを解消するには五孔尺八に補孔を加えることが必要だと考えたが、それによって尺八本来の音色が失われることも危惧した。そこで、地歌箏曲の旋律を分析した結果から、補孔の数を「最低限の一つだけ」とし、さらに従来の指孔の位置変更を行うことで、いびつであった尺八の音列を矯正した。また虚僊は、楽器製作者の勘に頼っていた楽器の調律について、尺八同士の合奏だけでなく、他の楽器との合奏も可能なように、「基準音高」を使うことを提案した。虚僊が楽器製作者に対して音叉を用いるように呼びかけたことは、現在の尺八製作者のチューナー使用に受け継がれていると考えられる。さらに虚僊は、楽器調律における「五度の重要性」を、他の邦楽ジャンルや西洋音楽に共通するものと指摘し、これを新楽器の調律に取り入れ、「純律尺八」として発表した。

以上の考察から導かれる重要な結論であり、また審査において高く評価されたのは、次の2点である。

1) 村治虚僊が村治流を立ち上げ、楽器を改良して音楽的なレパートリーを広げた経過を詳細に示すことで、法器から楽器へと変化した尺八の発展過程を明確に示すことができた点である。特に、虚僊が考案した「純律尺八」について、指孔を一つ増やして六孔にしたことよりも、筒音と第三孔の関係を音叉によって完全五度に調律した重要性を指摘したことには大きな意味がある。なぜなら、法器であり続けるなら完全5度に調律する意味はなく、三曲合奏で尺八を使用することになってはじめて、他の楽器と合わせるための調律が意味を持つからである。つまり、尺八が音楽を演奏する「楽器」として認識されたことを象徴的に示すのが、完全五度の重視であるといえるのである。

2) 村治虚僊という一人の音楽家の個人史を、他の流派の音楽家や楽器製作者との関連で記すことにより、昭和音楽史の新たな面が明らかになったことである。特に、第三章で詳細に記述されている楽器改良の歴史はたいへん興味深い。邦楽器の改良は、十七弦箏やオークラウロといった代表的なものを除けばほとんど知られておらず、邦楽は保守的で伝統は不変であるという認識が根強い。ところが、本論文には尺八だけでも200に迫る改良の事例が記されている。夥しい数の特許や実用新案が提出されていることは、邦楽に対する一面的な見方を改めるきっかけになるだろう。

論文全体をとおして、緻密で粘り強い研究姿勢と、それに見合う十分な成果を読み取ることができる。着想と研究手法がきわめて独創的であり、説得力のある論理的な構成となっていることも高く評価され、当審査委員会は全員一致で、本論文が申請者に対して博士（音楽）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

試問の結果の要旨

音楽文化研究科博士後期課程3年次生、村治学による博士学位論文公開試問の結果について報告する。公開試問は、令和3年2月2日、11時より、Teamsによるオンライン開催の形で行われた。論文執筆者による発表に20分、試問担当者による試問と傍聴者からの質問に20分を充当した。

発表で、論文執筆者はよく準備されたスライドを用いて、時間内に論文の全体像をわかりやすく提示した。試問では、個別で専門的な内容から音楽文化全体に大きく関わるものまで、様々な質問をよく理解して誠実に応じ、適切な対応を行った。真摯な研究姿勢と優れた説明能力等を評価し、試問担当者全員一致で合格と判断した。